國學院大學学術情報リポジトリ

談話室 ジャパンデーたまごプロジェクト

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 千葉, 保, Chiba, Tamotsu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000162

ジャパンデーたまごプロジェクト

千葉　保

二〇一四年九月に田嶋一教授たちとネパールの山間部にあるスリ・ジャナタ小学校を訪問した。首都カトマンズから曲がりくねった山道を三時間近く走ると霧の中から目指す学校が現れた。子どもたちが登校時に摘んできたという真っ赤なハイビスカスのレイを掛けて歓迎してくれた。笑顔が印象的な子どもたちだった。

教室に入ると、子どもたちは「ナマステ！」とはにかみながら迎えてくれた。挨拶は英語だった。「Please sit down」というと、「Thank you sir」と声を揃えた。

ネパールでは日本の国語に当たるネパール語の時間以外の教科は全て英語で教えていた。教科書も英語で書かれている。四年生はアメリカのリンカーンなどの偉人伝を英語で学んでいた。五年生の英語の教科書を見ると、日本の中学二年生よりもレベルが高そうだ。先生に「英語で教えるのは平気ですか」と聞くと、「国から三日間の研修があっただけだが、教科書を教えるくらいなら何とかなります」と話してくれた。彼らも小学校から英語で教わってきたのだった。

カトマンズの一つの行政区の教育長と話す機会を得たので、英語中心で教えるわけを尋ねてみた。「ネパールは多くの民族が暮らしているが、全てがネパール語を話しているわけではなくそれぞれが違う部族語を話している。ネパール語を教えて国民全員がネパール語を話せるようになることも一つの方法だが、英語をみんなが話せるようになると、ネパール人としても国際人としても通用するようになる。難しい決断だったがネパールは国際人を育てることを決意した」と話してくれた。

ネパールでは一日二食の習慣だが昼にはやはりお腹がすく。友人のジギャン・クマル・タパ氏が小麦粉に砂糖をまぶしバターで炒めた「給食」の提供を支援するようになって、この小学校に「給食」が定着した。子どもたちは美味しそうに食べていた。だが、子どもたちを観察すると、敗戦後の日本の子どもたちがそうだったように青い鼻汁をたらしている子が多い。田嶋教授が蛋白質不足を指摘した。そこで訪問したメンバーで給食の支援が何かできないか相談した。まとまったのが「茹で卵を給食につけて蛋白質を摂取させる。鶏は地域で育ててもらい、卵を学校が買い上げるシステムを作ろう。」というものだ。これは地域の自立にも役立つ支援になるだろう。この運動のために「たまごプロジェクト基金」を創設することにした。資金は我々の拠出や、クラウドファンディングなどでの呼び掛けで捻出することにした。そうして実施の見込みが立ち、学校との具体的な折衝担当をジギャン氏の姪スプリアさんが担ってくれ、翌年二月には、月二回の「ジャパンデー茹で卵給食」が始まった。日本という国を知らなかった子どもたちも、この給食で日本のことを意識するようになった。

そんな中ネパール大地震が起き、全土に大きな被害が出た。スリ・ジャナタ小学校も校舎に亀裂が入り、休校を余儀なくされた。子どもたちの中には、土砂に埋もれ十時間後に救出された子もいたが、全員の無事が一週間後に確認された。この基金に多くの人から救援資金が寄せられた。この資金を使って援助物資を手配した。子どもたちの住む村や援助の手薄な地区へ、米二十五キロ、蚊帳、簡易テント、食料油、砂糖などをジギャン氏や日本に留学しているネパール人学生が中心になって届けることができた。

学校の復活と共に「ジャパンデー茹で卵給食」を再開した。月二回の給食を子どもたちは待ち焦がれるようになっている。学校の就学率も上がったそうだ。さらに回数を増やすこと、他校にも広げること等が私たちの新たな課題になっている。

我々の旅から始まった「ジャパンデーたまごプロジェクト」は、ネパールの子どもたちの心に小さな灯を点した。こうした国際交流こそ平和への一歩だと思うのだ。みなさんの協力も得て発展させていきたい。

（教育学）